

---

# 元魔王の覚醒(悪ルート)

ブレオドラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

元魔王の覚醒（悪ルート）

### 【Zコード】

N8777V

### 【作者名】

ブレオドラ

### 【あらすじ】

かつて異世界に行き魔王として自儘に生きた大祐とその部下たちは元の世界に帰ると同時に人間に戻っていた。人として修業し強くなつた大祐たちは強さを競う世界大会に出場する。その大会での一戦が大祐の、そして世界の未来を大きく変えることになった。

この物語は残酷な描写があるので苦手な人は注意してください。またこの作品は『元魔王様、頑張る！』から派生した物語です。IFルート？ではありますが本編より未来ですのでネタバレ注意し

てください。

## 最初の目覚め（前書き）

元魔王様、頑張る！をまだ読んでいない人へ。

この話は元魔王様、頑張る！28話からの分岐です。

準決勝 第1試合 笹川大祐 VS サーマレイス＝セラヴァイル

大祐はサーマレイスの攻撃を受けて倒れ伏し、これ以上の戦いを諦めたところからの話です。

## 最初の目覚め

魂と肉体は相互に影響し合う。

異世界で魔王の肉体を得た大祐は、その魂を魔王に汚染された。

そうして魔王となつた魂は再び火星に戻り、人の肉体に収まつた。

魂と肉体は相互に影響し合う。

故に魔王の魂の影響を受け、大祐の性欲は日々増大していた。

一方で魂も肉体の影響を受けていた。

脆弱な人が魔王の魂本体を変質させることはできないが、魂の表面に人としての性質が付着した。

魔王と比較すれば微々たるもの。

しかし、あくまで肉体を介して世界に存在する魔王大祐にとってその表面の部分が魔王としての完全な覚醒を妨げ、人としての理性を保たせていた。

尤もこれは大祐本人が魔王の力は必要ない！自分の力でやり遂げてみせる！という強い意志を持っていたことも大きく影響しているのだが、

それが無くなつた。

サーマレイスに倒され、心が折られてしまった。

諦めてしまつた……

サーマレイスにより斬られ肉体が傷つき弱まつたこと。

心を折られ意志がくじけたこと。

この2つの要因によつて、今まで微妙なバランスで保たれていた天秤が一気に魔王側に振れた。人としての部分を押しのけ魔王が表面に現れる。

結果として魔王は目覚め始めた。

変化は突然だった。

サーマレイスは自分が倒した男を見て、心の中で称賛の言葉をかけていた。

観客やアナウンス、勝敗の判定員も試合の終了を理解しサーマレイスの勝利宣言をしようとしている。

「準決勝第一試合、勝者サーマレイ

」

言葉が途中で止まる。

歓声を上げかけていた観客もシーンとなる。

サーマレイスも表情を真剣なものに変えてそれを見つめた。

大祐の身体が炎に覆われていた。

（あれは不死鳥の巫女の。）

サーマレイスは直ぐにその正体を見破つたが変化はこれだけではなかつた。

再生の炎の色が徐々に黒くなつてゐるのもそうだが、それ以上に大祐の魔力がありえないほどに高まつてゐる。

先ほどの一撃でほとんどの魔力を使い切つたはずが、下級、中級、上級相当の莫大な魔力とつてゐる。

その強大な魔力と何より発せられる禍々しい気配を察知したサーマレイスは危険な存在と認識。

即座にとどめを刺すために魔法を発動させようとしたとき！

一際強い魔力を放ちながら大祐が起き上がつた。

その魔力に気圧されたのと、一旦様子を窺つために魔法陣はそのままで魔法を止めたサーマレイスからは表情がわからない。

ただ自分の身体をじつくりと見ているようだ。

大祐は、力が湧きあがるこの懐かしい身体を取り戻して思う。

（魔王の身体になってしまったか……）

再生の炎が“魔王の身体”を再生し終えて消える。

（所詮、負け犬は負け犬。人としての私が何をしたところで貴族や幼馴染に勝てるはずもなかつた……）

真紅の瞳で身体の状態を確認する。

（だが……それも、もうどうでも良いくことだ。）

突然の覚醒でまだ完全ではないがそれでも人間とは決定的に違う  
その身体。

（もう田代覚めてしまつたのだから。）

同時に破壊の欲求や殺人衝動でさえも蘇りつつあつた。

顔を上げた魔王はその真紅の眼でサーマレイスを見つめる。

それに対しサーマレイスは即座に魔法による攻撃を加えた。

いろいろ聞きたいことや確認したいことはあつたが、それ以上に危険な存在だと本能が訴えている。

今までとは違い一撃で殺すつもりで全力の魔法を放つ！

放された魔法はスピードもパワーも今までの比ではなかつた。一瞬にして大祐の元まで到達し貫く、と思われた瞬間に大祐の姿が消えた。

直ぐにサードレイアの後ろに現れ、彼女が驚く間もなくその腕を取る。そしてそのまま左腕を握り潰した。

普段のサーマレイスからは考えられないような絶叫が響き渡る。

「やかましいぞ。痛覚を10倍にした程度で一々喚くな。」

魔王は鬱陶しそうな顔をして言ったあと、掴んだ腕を離しサーマレイスの顔を殴り飛ばす。本人にとつては軽く、人間にとつては絶大な威力で！

吹っ飛ばされたサーマレイスは必死に魔法で回復させながらふらふらと立ち上がる。その顔には貴族としての誇りはなく戦意と警戒、恐怖があった。

「最初からこうすれば良かつたな。」

サーマレイスを見ながらぽつりとつぶやく。

「あれだけお前を手強く感じていたのに……今はもう敵とさえ認識できない……」

そしてその身から莫大な魔力を放出させつつ声を大きくして叫ぶ！

「努力をして力を得るなどバカバカしいな…………ふ、ふふふはつははははは！我ながら愚かなことを考えていたものだ！！そうは思わんか！？サーマレイス。」

サーマレイスは答えない。答えず必死に回復を行つが上手くいかない。ほんの少し触られただけで、大祐の魔力が色濃く残りそれが魔法による回復を阻害する。

そして魔王は返事をしないサーマレイスに気にせず一人で言葉を続いている。

「人として努力して得られる力など、この魔王の力の欠片ほどもないではないか！？くだらない！－アハハハハハハハハハハハハハハハハハ－！」

一人で笑い転げる魔王！

だがその身から溢れる魔力は尋常ない。あまりに濃密な魔力はその濃度の高さゆえに黒いオーラとして可視化されるほどになっていた。

一方これを見ていた観客席では部下たちが真っ青になつて話し合つてゐる。

「やばいってこれー..どうすんの？」と慌てた声でエロ太が言つ。

「どうするつて……どうしようもないだろ……」

「だけどこのままじゃ、取り返しのつかないことになるぞ。」

同じく慌てたAやDも震えながら言葉を発する。

他の観客たちも急な展開に呆然となっている。その眼下では一人咲笑している魔王と、それに対し魔法を放つサーマレイスがいる。

だがサーマレイスの放つ魔法は1つたりとも大祐には当たらない。ただ笑っている魔王の身体から放たれる魔力によつてすべての魔法が止められていた。

「まだ、起きたばかりだから1割も力を出せないとと思つ。だから今のうちに！完全に覚醒する前になんとかしなきや！」

Dの言葉に2人は頷き、部下たちは必死に対策を検討し始めた。

一方、フィールドではようやく大祐が落ち着きサーマレイスを見つめていた。

サーマレイスはそんな様子も気にせずひたすらに魔法を放ちまくる。

強烈な毒性の花粉、ダイヤさえ断ち切る葉の刃、物理的には金でさえ魔法的には一部の上級の結界さえ溶かす強力な酸性の粘液、他

にも肉食植物、吸血植物、強靭な弦に金剛の樹などありとあらゆる上級植物魔法を放ちまくるがどれ一つとしてギリギリのところで大祐まで届かない。

（まさか、これほどとは予想していませんでしたね。）

心の中でそう思いながらもひたすらに魔法を放つ。少しでもこの魔王という存在のデータを測定するために。

そう、実際のところ今のサーマレイスは焦つてはいなかつた。

最初は直感でやばいと判断し慌てたが、魔法で精神を安定させたため今は落ち着いている。

魔力の感覚的に危険な存在だというのは今も思つてゐるが、会場を囲む強力な結界の効果が作用すればこのフィールドに入った時の状態に戻される。詳しいことはその時に聞けばよい。

大祐の魔力から考えると今のサーマレイスでは敵わないのがわかる。だが実のところサーマレイスも先ほどまでの戦いでかなりの力を使つてるので全力時ならばここにまで一方的な展開にはならないだろう。

他にも本家の当主たちならば十分対応できるレベルであり、特に虹髪の一族の次期当主の方が大祐よりも強い魔力を持つてゐる。あるいは上級者たちが複数名で協力すれば問題なく対応できると考へる。

ただこれが会場の外で暴走した場合などに備えて、多くのデータを計測しようとしている。

しかし一つだけ問題があつた。

この時サーマレイスも自覚できないわずかな焦りと恐怖が彼女の判断を鈍らせたのであらう。現在感知できる魔力が大祐の最高の状態だと思い込んでしまつた。

それも仕方がない。彼女は生まれながらの強者であり恐怖を感じることなのそれほど多くはなかつたのだから。

そして貴族の中でも上位であるサーマレイス以上に強いものはこの会場にはいないため、貴族や政府の人間は魔王の力の大きさを正確に把握することができなかつた。

これが、のちの悲劇を引き起す原因の一となるのだが……

サーマレイスが魔法を撃ち続ける間も大祐はただ彼女を見つめていた。

いや、正確には考え方をしているだけでサーマレイスを見てたわけではないのだが……

（まだ、完全ではないか……）

黒い魔力をまき散らしながらそう思つていた。身体から溢れる魔力は大祐が意識したものではない。何もせすとも勝手に出てきてそれが偶然サーマレイスの魔法を防いでいるだけだ。

無意識に魔力が溢れている時点でまだまだコントロールしきれないのがわかる。おまけに溢れる魔力にしても、完全に覚醒した場合の1割にも満たない量だ。

身体は完全に魔王のものとなつたのに何故、力は不完全なのか？

おそらくは魂にわずかに人間の部分が残つているのだろう。結果としてそれが身体と魂の接続を妨げていると考えられる。

この人間としての残りカスを完全に消さない限り、これ以上の力は引き出せないであろうことが感覚でわかる。

しかしそれはあとで対応しようと考え、さつきから目障りな女で遊ぶために意識をそちらに向けた瞬間、不思議な魔力の波動を感じた。

見上げると、この会場の開けた天井から見えるただ一つの外の建物である始原の塔が見える。その遙か頂上、雲を越え大気圏から出るギリギリの高さにある部分から不思議な魔力が放出されている。

もちろん魔王であつても素の状態では高すぎるために見ることができないが、魔法によりそれが感じ取れる。周りの観客は、サーマ

レイスもだが、ジリヤーの波動に気付いていないようだつた。

そのことを疑問に思うより先にその波動が効果を發揮する！

「ちいさー！」

大祐は急激に力や衝動が抑えられていくのを感じていた。

同時に人としての部分が息を吹き返している。

完全に覚醒していれば別であつたのだろうが、今の不完全な状態では抗しきれない。

「グッ……クソが————!! なんだよせつかく

L

身体から溢れていた魔力が消える。サーマレイスの魔法も通るようになつたが、大祐の再びの変調に對して動きを止めている。

— — — — —

この後のことば簡潔にまとめる。

急激な変化の連続による激痛が走り、そのまま大祐は氣絶した。

結果としてサーマレイスの勝利となり、大祐は敗退となつた。

観客たちはあまりの展開に呆然とし何とも言えない表情をしていた。

ただ大祐に対しても変な奴、あるいは頭のおかしい奴と思う程度の認識であり、真に危険な存在と気づいたものはいなかつた。

大祐はサーマレイスに攻撃を加えたものの彼女は即座に反撃に移つたし、その後大祐は一人で笑いまくり、そしていきなり苦しみ勝手に倒れた。

傍から見ているものにとっては訥然としない意味不明な展開となつただけだ。

だからこそ多くの者は恐怖を感じることはなく、中には大祐をバカにする者までいる始末だった。

これもまた悲劇へとつながる要因となる。

試合後の結界の再生機能により元の状態に戻った大祐はそのままサーマレイスたちと会談。この時には元の人間としての大祐に戻っていたので魔王の力を取り戻す意思はなくなっていた。

今回の変調の原因を話し今後再び暴走する可能性があることを考え、始原の塔での設備を使い、魔王化抑制のための研究を行うことを提案し承諾される。

以後大祐たちは学校へ行かず研究を行っていた。しかし魂への干渉はかなりの精密作業であり、人のみでそれをしようとするのは困難であるため研究はなかなか進まない。それに対し表立っては見えないが魔王化は着々と進行していた。それに伴い精神も変質していく。

貴族、政府側は監視をつけながらもこの事態をそれほどの脅威とはみないでいた。それは貴族の中でも上位者であるサーマレイス

イスの見立てと大会で計測されたデータから軍で十分に鎮圧できるレベルと認定されたからだ。

さらに大会からある程度経つても大きな変化は観察されず、定期報告も問題なく行われていたためでもある。

あとになつてこの判断が間違えだつたと知るがその時には遅い。

彼らはこの覚醒する前に大祐を殺すべきだつた……

そして時は流れる。

必死に抑え込み表には出さなかつたが、半分ほど思考が魔王に染まつた時に異世界への扉が開くことで時代は大きく動くこととなる。

## 最初の目覚め（後書き）

難産でした……というのも最初はサーマレイスをボコボコにする話を書いたんです。四肢を壊して、耳や目もひどいことになつて体や顔を蹴りまくつて。

しかし書き終わつてからこれをやつてしまふと政府から危険人物として暗殺対象にされて異世界編へとつながらなくね？と気づいたために一から書き直すことにして……この話も改めて書き直すかもしれません（やるとしたら異世界編が終わつてからになりますが）

そんなわけで魔王が火星で大暴れするのは異世界編が終わつてからになります。

気長にお待ちいただけると幸いです。

## 異世界編 プロローグ（前書き）

本来はもう少し後に書く予定でしたが、私がどうしても書きたくなったため書いてしまいました。まだまだ未熟な私の作品ですが読んでくださってる方でちゃんととした順番で読みたいという方はこちらは読まず本編が進むのをもう少しお待ちください。

## 異世界編 プロローグ

火星の国家、通称『開拓者』の首都中心に高くそびえる塔『原初の樹』。街一つが入るその巨大な塔の中層に研究室が与えられた大祐は、部下とともに今日も研究を行っていた。

前回の大会で魔王の力が覚醒して以来、日を追うごとに魔王の力が身体を侵食しているのがわかる。それを食い止め人として生きるのかあるいは受け入れ魔王として復活するのか？自分の中で答えが出ていない。

優しい人に触れると愛しく思い、守つてあげたいと思う。

傲慢な人、横暴な人を見ると感情のままに殺したくなる。

人と魔王

善意と悪意

理性と本能

大祐の中ではそれが危ういバランスで存在していた。

しかし、ついにその天秤が一方に振れてしまつ日がやってきた。

さすがにそれだけの情報では何もわからない。  
風太ことエロ太は山彦や竜也と顔を見合させるもみんな心当たり

「うーん…」

「どうしたんだリーダー？」

浮かない顔で唸つてる大祐に風太が尋ねた。

「なんか変だ。」

「変？」

「やつ。変。」

はなかつた。

ちょっととした//スをしてしまつた昨日の実験のことかと思つた山彦は

「おかしなデータがあつたか?どつかで//スしたかな」と尋ねると

「違う。そんなんじゃなくて空坂といつかなんといつか…」

ますます訳が分からぬ。すると大祐がいきなり

「あーもーとりあえずついてこい!なんか変な感じがする場所があるから行ってみよ!」

そしてついて行つた先にあるものを見た部下3人は

「れば…」「ウソ」「マジか…」

そう呆然と声を発した。

そもそものはず、普通に生きていれば 99.9999999 % の人は“それ”に遭遇することなどないのだから。ましてや 2 度目となるともっと低い可能性だ。

「さすが俺様！まさかもう一度この田が来るとば」

そつそつにあるのは“異世界への扉”

『ゲート』だった。

## 1話 勇者の召喚

「…ヴェスター、オーラ、シーサ、ルーフェン、ザクツェン…」

玉座に座る王から離れた位置で10名の魔術師が召喚の儀式を行っていた。

「…ヴェスター、オーラ、シーサ、ルーフェン、ザクツェン…」

本来なら10分ほどで終わる詠唱。しかし既に20分は経過している。

それはより強大な力を持つ勇者を召喚するために研究した結果、何度も繰り返し詠唱することによってより強力な力を持つものを召喚できると判明したからだ。

「…ヴェスター、オーラ、シーサ、ルーフェン、ザクツェン…」

かつて人間は獣人、エルフ、ドワーフなどの亜人あるいは人間同士で争っていた。そこに強大な力を持つ魔族が攻めこんできただことで人は争いをやめざるを得なかつた。圧倒的な力を持つ魔族の前に人や亜人は協力して戦つたが、それでも敵うことはなく緩やかに敗北していった。

そんなときにある魔術師が召喚の魔法を生み出した。それにより味方の数を増やそうとしたが呼び出されたのは数名の異世界人であった。

しかし彼らが戦局を変えた。異世界人は強大な力を持つて召喚されたのだ。その力を持つて魔族と戦い、ついには魔族を押し返すことに成功した。魔族は敗戦により分裂し内紛となつた。これにより戦争は終わつたのである。

そして異世界人は人々に乞われ、それぞれの国を作つた。

しかし時は流れ、人はまた争つようになる。

古の伝説。

異世界の勇者。

それらが呼び出され戦争に利用されるのは当然の流れだつた。

異世界人の魔力を受け継ぐ各国の王族はその魔力を利用し勇者を呼び出す。だが呼び出されるものすべてが自分たちに協力してくれるわけではない。そう悟るに才ほど時間はかかりず、そのため召喚には改良が加えられた。

今、召喚を行おうとしている国、『オルティガ』では召喚された異世界人の魂に隸属の鎖をつけられるようになつていて。それにより勇者は王族の命令に対し疑問を抱くことなく服従するようになる。

（繰り返す詠唱により、魔力を過剰に供給することで過去の誰よりも、他の国の勇者よりも強力な異世界人を呼び出すのだ！そして世界を征服する）

そう考える王の前で魔術師が囲む魔法陣はより強く発光する。

「…ヴェスター、オーラ、シーサ、ルーフェン、ザクツェン…」

魔術師たちは慎重に詠唱を行つ。筆頭魔術師でもある第2王子は思つ。

（失敗は許されない。この儀式は1度行えば100年間行使不可能になる。何としても成功させる。そしてこの国も世界も私のものに！）

そして魔法陣は青の輝きから赤い光へと色を変えた。

「…ヴェスター、オーラ、シーサ、ルーフェン、ザクツェン、フィラス、エンデー！」

途端に目がくらむような光が溢れる。

「クッ！」

誰かが声を漏らした。

そして光が収まつたとき、人々が目を開いた先には『4人の男』  
がいた。

（どんな世界だここは。）

ゲートに飛び込むと同時に強い光が差し込んだ。そうして光が收まる気配を感じてエロ太は周囲を見渡した。

自分のすぐそば正面のちょっと右に大祐が、自分に並んで右に山彦が左に竜也がいる。足元には巨大な魔法陣があり、大祐はさつそくその魔法陣を観察している。半径10メートルほどの魔法陣の縁に沿つて10名の男女が等間隔に並んでいる。おそらく彼らが召喚術を使用したのだろう。

部屋全体を見渡すとかなり広いことに気付いた。体育館ほどの大きさはあるだろう。壁際にはたくさんの兵士らしき連中が武器を持ち整列している。さらに奥には僕は選ばれた血統ですと言わんばかりの豪奢な衣類をまとった貴族っぽい連中。みんな俺たちを観察している。どうやら驚いているような表情のものと観察しているようなやつの2通りの人間たちだな。

正面の奥が段差となつておりその一番高いところには玉座に腰かけた男性がいた。その隣には輝く金色の髪にすらつとした体のラインが浮き出るドレスを着た美しい王妃がいるのがわかるがそちらには目がいかない。ただ玉座に腰かける男に目を奪われる。

頭を下げるくなるような、恐怖するような不思議な感情が胸の奥から湧き上がる。

そこでふと、違和感を覚える。

（女好きの俺が女よりも男に意識を奪われている。まさか俺は男好きになってしまったのか！？　いやいやそんなわけねえ。そもそも異世界にこうしてきたのは美しい女奴隸を求めてだ！断じて男が目当てじやない！）

もう一度玉座に田を向けるとやはり同じ金髪の40歳代くらいの女性ナイスミドルがこちらにしゃつた。

美しいオールバックの髪に、しつかりと鍛え上げられた衰えを感じさせないボディ。彫りの深いワイルドな顔立ちと全体から発せられるオーラみたいのが見えるようでカリスマを感じさせる。

（ああ……なんて素晴らしい方なんだ。もうホントの方にならば俺の後ろの初めてを捧げても、俺があの方の穴を掘るのもどうりで…）

そこまで考えて工口太は我に返つた。

-----  
何考えてんの俺？あり得ない。ヤバい泣きそづ…

自分が思ったことのおぞましさに涙を浮かべたエロ太は何気なく左右を見ると山彦と竜也も玉座の男に心を奪われるのがわかつた。

そこで再び違和感に襲われる。

（どういうことだ？俺だけじゃなくこいつらまで。こいつらも俺と同じく好みにうるさいようで綺麗な女なら誰でも良いってタイプだぞ。あの王妃っぽいのは明らかにストライクだろうに男の方を見てる…………もしかして…？）

頭の中にある仮説が浮かんだエロ太は何気なく大祐を見るとその変化に驚いた。

開拓者はもともと日本人であった初代皇帝が人類初めて火星に到着し建国した国である。なので国民の半数は日本人の血が少なから

ず流れているし、今ここにいる4人は明らかに口系の外見だった。

黒髪黒目、168センチと微妙に170台に届かない身長。頭が大きめで足は少し短い。顔も決してイケメンではなく整った顔立ちの笹川家の中で唯一の例外、一瞬血がつながってないのでと考えそうになるがよく見ると結構似てる顔立ち。それをよく愚痴つてたリーダー 笹川 大祐。

そのリーダーの瞳が今は“真紅”に染まっていた。

それは魔王の証。

魂に刻まれた魔王の力が肉体を侵食している証。

1500年もの間、世界を気ままに蹂躪した“主君”の瞳。

大祐は真紅の眼を魔法陣へと向けている。魔法陣に描かれた式の情報を解析しているようだ。

仮説なんて頭から吹き飛び、『なんで今魔王の瞳が！？』 そう思つたとき

「異世界より来られた勇者のみなさま。ビツビツちうく」と召喚士の1人が進み出て言った。

それは玉座に座る男によく似た青年、筆頭魔術師である第2王子シユタイナーであつた。その声を聞くとすぐに疑問も搔き消える。

(この方もまた素晴らしい方だ。美しい声が心に響いてくる。)

指示に従い歩こうとする。

(…………や、待て待ておかしいぞ。俺は女が好きなんだ！…………それにしても立派な体躯だ！魔力もあるし素晴らしいな。ぜひ俺の恋人に――って…………うーん…………もう何なのこの状態！？…………ひとまずあとだ。『こちやんこちやん考えるのは後にしてリーダーの動きに合わせよう。たぶん大祐は正常っぽいし。極力床を見るようにしよう。）

シユタイナーの後ろに4人が続く。

そして玉座に続く階段の前までくるとシユタイナーは立ち止まり4人に対して跪くよう指示した。

3人が素直に跪くのにつづきエロ太も跪いた。

(あつれー何でリーダーも従つてゐるの？おかしくない？)

山彦と竜也を横目で見るとやはり玉座の男とシユタイナーに心を奪われた様子がわかる。次いで大祐を見ると瞳の色は元に戻っているがやはり正常のようだ。

（とりあえず）今は大人しくして乗り切らつ）

改めて決意すると自分の足に周りから見えないよう仄を突き立てる。

ほじなくして上方から低い声が響く。

「よくぞ来た！異世界の勇者たちよ。余はオルティガ王国国王ガイアス3世である。現在わが国には未曾有の危機が迫つてある。西のクリスト帝国が異世界から人間を呼び出しその力を持つて戦争を行つてゐる。それに対抗するためにわが国でも同じ異世界人を召喚した。それがそなたらである。どうか我が国の平和と繁栄のために戦つてほしい。」

そう一人で一方的に言い切つた。

「「はー・若輩ではありますオルティガ王国のために全力で戦う覚悟にござります」」

突然の一方的な話に対してもか疑問を感じるビックリか、むしろ喜んだ様子の山彦と竜也は高揚した声で宣言した。

もし自分の足に痛みを与え続けていなければエロ太自身もまた何の疑問も覚えることなく同調していたであろうことがわかる。

（やつぱり召還されると同時にビックリされてもいるか。）

心中で考えるエロ太の様子に氣づくこともなく王は

「つむ。そなたの忠誠に期待する。」とだけ言いあとは興味がないとばかりに王妃とともに退出した。

続いて貴族が退出する気配がする。

その気配がなくなると上品なメイド服のよつたを着た30代くらいの侍女が近づき、

「はじめまして。わたしは皆様のお世話を任せつかっております侍女の代表、メロディア・フランヘルと申します。本日はゆっくりお休みいただくよう指示を受けております。どうぞいかしく、お部屋まで」案内いたします。」

やつまつこつこつてくめるよひに足された。

部屋へ案内される途中ヤマとタツのコンビはこりこり質問してい  
たが、詳しいことは明日改めて説明されるといふことだつた。

広く大きな廊下にはフカフカな絨毯が引かれていて、壁際には等  
間隔で絵画や壺などが置かれている。外を見ると日が沈んでいるこ  
とがわかるが廊下の天井近くには光る石が埋め込まれていて室内は  
明るい。

5分ほど歩くと田的の部屋に到着した。ドアを開けるとそこには  
広い部屋があり長椅子やテーブル、暖炉などがあった。部屋の中に入  
ると左右に6つの部屋がありそこが寝室らしい。

各自に若く美しいメイドが世話係としてつくといふことで部屋に入  
つてきたが大祐が「急な召喚で、またガイアス様との対面で精神  
的に疲れた。明日から全力でお仕えするためにも今日は4人で早め

に休ませていただきたい。」という感じの言葉を失礼にならないような表現で告げた。

メイドたちは通路の向かい側の部屋にいるので用があるときは声をかけてくださいとだけ言い退出した。

メイドたちが部屋を出るとテーブルを囲むようにして配置された長椅子に腰かける。季節は春か秋なのか程よい気温で暖炉には火がついていない。テーブルに置かれていた飲み物と果物のようなものに手を付け、軽く腹ごしらえをして改めて今日の出会いについて話し始めた。

15分ほどガイアスへの称賛を風太以外の3人が述べた後、

「いやーしかし素晴らしい！ガイアス様のために戦えるなんて光榮だ。」

「確かに。だが油断はならないぞ。俺たちと同じように異世界から召喚されたやつが他国にいるらしい。侍女の話じゃ異世界人はこの世界にくる際に強い能力を「えられるらしいから俺たちより強い力を持つものだつているかもしねない。」

「明日、時間があればどのくらいの力が付与されたか見るために兵

士の訓練所みたいとこを借りて確かめてみよ。リーダーの俺から頼んでみるよ！」

「それは名案だな。よろしくな。」

山彦と竜也と大祐の3人は機嫌よそそつに話している。

しかし先ほどから会話に加わらないエロ太に疑問を持ったのか山彦がエロ太に話しかけた。

「おいおい、さつきから黙つてるけど大丈夫か風太。そんなんじやガイアス様のお役にたてないぞ！」

返事を返そうとしたエロ太より先に大祐が口を開いた。

「ま、ま、ま、今日は異世界に来たばっかで疲れてるんだろ。メイドたちにも言つたけど明日から全力で働くために今日はもう寝ようぜ。俺はこの部屋にするけどお前らはどこにする？」

その言葉を受けみんなで自分の寝室を決めた後、大祐は3人に部屋で寝るように改めて促す。

しかし山彦も竜也も、もう少しガイアス様や今後について話し合おうと言ひ寝るのを拒む。

やんわりと休むよう促すがそれでも拒み続ける一人に対して、沸点が低くなつてたのか大祐は

「あ————もうメンドクサイ！ただでさえイラつこしてるのにー。」

そう叫び一人の鳩尾へ同時に拳をめり込ませた。気絶した一人を同じ部屋のベッドへ放り込んだ後

「エロ太。お前は大人しく寝るの？逝くの？どっち？」

「話がしたい。」

エロ太が告げた途端、無表情で近づいてくる大祐。

あわててエロ太は言った。

「待つて。違うから。リーダーがイライラしてるのは知ってるよ。俺も「ガイアス様、ガイアス様」言つてるヤマやタツを見てると氣味が悪くて仕方ないもの。それで機嫌悪くなつてるんだよね？ただそれ以上に困つてるのが俺もちょっとおかしくなつてることなんだつて！だつて女好きの俺がガイアス様は素晴らしいとか思つてるんだよ？隣にいた綺麗な女よりも男をガン見しそうになつてたんだよ？泣きたいのはこっちなんだつて。予測では召喚陣に何か仕掛けがあつたんだろうけど具体的なことがわからないからその点について

説明してもらいたいんだって。だから氣絶させるのは勘弁して。」

一息に言い放つた言葉を聞いた大祐は苦笑しながら椅子に座つて工口太に尋ねた。

「いつから氣づいた?」

「召喚されですぐ。だつて男に夢中になるとかありえねえし。」

「なるほど。そんなことで正常な思考を少しでも取り戻せるとこりが工口太っぽいな。元に戻りたい?」

「当たり前じゃん! ガイアス様じゃなく王妃様を見つめたい。元の世界じゃ逮捕されてもおかしくないレベルで舐るように見つめたい。」

「

後半の気持ち悪いセリフは無視して大祐は立ち上がる。

そして工口太に近づくと、右腕を振り上げ工口太の腹部に突き刺した。

「なー?」

「動くなー! じつとしてる。血は出でないだろ? お前の魂にかけられている服従の鎖を外してる。」

「んなイキナリかよ！せめて説明を！……ってかちょつ！待つて！イタイイタイなんかわかんないけど凄い痛い！」

「我慢しろ。…………ほら終わりだ。」

言つと同時に腕を引き抜いた。その手には確かに血や他の汚れは一切ついていない。

「はあ、はあ、はあはあ、…………せめて、せめて、…………せめて事前に何やるかの説明が欲しかった。」

涙目で大祐に抗議する工口太。

「そんなことより、どうだ？まだ男に心が奪われるか？」

「はあ……もう大丈夫。」

工口太は呼吸を整えながら自分の状態を確認した。

（うん、もうあのクソ男のことなんて何とも思つていしないな。むしろ王妃を襲つてやりたい。あとは綺麗な奴隸を買つていろいろやって、貴族の娘を誘拐していろいろやつて――――――つと思考がとんだ。それよりも今は現状の確認だ。）

「結局俺たちは何されたんだ？」

エロ太は自分で知らべるのもメンディしさつと理解するために率直にリーダーに尋ねてみた。

## 2話 人生2回目？の異世界訪問（後書き）

ホントは現状説明も入れてもっと長くなる予定だったんですけど、分けることにしました。というわけで次回が現状確認になります。ただ基本的には『元魔王様』を優先して更新していくんでこっちの更新は遅くなります。おそらく次の更新は9月の2週以降になると思います。

### 3話 現状確認、そして……（前書き）

ひとまず投下しました。あとで修正する可能性はあります。

またあらためて注意しますが、これは悪ルートです。人助けなんてまったくしません。

人を殺したり、女を襲つたりするのがほとんどです。そういうのに嫌悪感を覚える人は注意してください。

### 3話 現状確認、そして……

「そうだ。ついでに聞きたいんだけどさつき大祐の眼、色が変わつてたよな？実はもう魔王の力を自在に引き出せるのか？」

「うへん……説明するのは良いけどあつたりでいいか？詳しく述べるなら聞くがいい。」

「できれば詳しく述べるがいい。だつてお前、魂の鎖を外したって言つたけど何でそんなことできるんだ？それに山彦と竜也の呪縛はなんで外さないのかとか疑問だらけだし。」

「あの一人のことは大した理由じゃないんだけど。まあ、良い。あー説明するけどその前にメイドからなんか飲み物もらつてきて。たぶん喉渴くから」

「わかった。」

エロ太はそういう言いでメイドたちに飲み物を持ってきてくれるよう頼んだ。

そして15分後、メイドたちは飲み物をテーブルに置いて退出する。

「さて、じゃあ始めますか。」

湯気を立ててる温かい紅茶のようなものを飲みながら大祐は話し始めた。

「最初にざつくり言つとだ、この国の召喚では異世界召喚によって勇者が呼び出される際にいくつかの能力を『えられる』らしい。

1つは話し言葉と文字の読み書きの情報。普通に会話ができるし、その棚にある本の表紙も読めるだろ？

2つ目が戦闘能力。かなり上昇してるみたいだな。俺たちの世界で言うなら下級の魔法使いが貴族たちのような上級クラスになるようなものだ。

3つ目が王族への服従の呪いだ。これを能力と言つていいかは微妙だけど

そんでこいつらの影響、特に2つ目によつて俺の中にはあつた魔王の力が表に出始めた。戦闘能力の付与は魂と肉体の両方に行つてゐるみたいでな。結果として俺の魂の深い場所に眠つてた魔王が起きた形だ。

その力を使ってエロ太の呪いは解いた。けどまだ完全に起きたわけではないつてところだ。わかったか？

「ホントにざつくりだな。まあ、起きた現象はわかつた。個人的に

はもう少し詳しい原理を

「

ヒロ太の言葉を遮り大祐はまた話し始める。

「詳しい原理は やっぱりやめよ。長くなるし面倒だ！  
それよりも今後のことだが。」

「面倒って……今後のこととは明日の國の連中から説明を聞いてからでいいんじゃないかな？」

「説明を聞くまでもなくわかりきつてるだろ。この國が俺たちにやらせようとしていることは、王の野心のため戦えってことだろ。」

「まあ、やうだらうけどな。」

お互いの顔を見合せ苦笑する。

そう、最初から俺たちを呪縛した理由なんてわかりきつていて。

先ほどの謁見の際に言つてたじゃないか。戦えと！

説明を受けるまでもない。

「しつかし、まあまあ……フフフ……本来は魔族に対抗するための勇者を人間相手に使うとは。…………フフフフフフフ  
ハハハハ！――まったく人間とは欲深いな！ハハハハハハ」

一人で哄笑する大祐。

（え！？どうしたんだ急に。いきなりキャラが変わつてねえか…まさかおかしくなつた！？）

思いながら大祐の顔を見つめると再び瞳の色が変わつていた。

遅れて部屋の空気が変わつていることに気付く。知らぬ間に冷や汗をかき体が震えていた。

よく見るといつまにか部屋に高レベルの結界がかけられていた。

大祐はバカにしたような目でエロ太を見ていた。

「何を驚くんだ“風太”？鈍い奴め。言つたばかりだろ？魔王の力を使ってお前の呪いを解いたと。」

大祐の声の質まで変わっている。

一言一言がすさまじい圧力となつて感じられる。

何で気づかなかつたのだろう。魔王の目覚めは完全ではないと言われたからか？

愚かなことだ。風太の力など魔王の〇・〇〇〇一%にも満たない。

魔王がわずかでも表に出始めたのならばそれはもう人外の領域。

「あいつらの召喚のおかげで既に抑制不能となつた。1秒ごとに、私の中の魔王の部分が人間の部分を侵食している。さっきまでは人の部分が勝つていたけどな。既に半分以上は魔王となつた。」

成程、おそらくは召喚についての説明を受けてる時に人の部分が負けたのだろう。だからこそ急激に変化した。

ニヤリと本人は楽しそうに、しかし風太にとつては恐怖以外の何物でもない笑みを浮かべて大祐は語る。

「バカな連中だ。普通に召喚し助力を頼むだけなら私も魔王の力を抑えるために必死になつただろうに、服従の鎖をかけようとするなんてな。殺してくれと頼んでくるようなものだ！」

（怖い！怖い！怖い！）

急激な話の展開に、そして何より大祐から放たれる圧力によってパニックになつた頭では何をしたらいいかもわからない。

必死に絞り出した事を傍田にもわかるくらい身体と声を震わせ風太は尋ねてみた。

「で、で、で、で、でも、あ、あ、あ、あ、あ、あい、あいつ、あい、あい、あ  
」

「少し黙れ。もつすぐお前も“戻るはず”だ。」

言われ押し黙る風太。

荒くなつた呼吸を懸命に落ち着かせようと深呼吸をしようとするとがうまくいかない。

それどころか過呼吸になりかけた時！

唐突に体の震えが止まり、汗も止まる。

呼吸も正常になり意識がクリアになる。それどころかむしろ力が

わき出るのがわかる。

この感覚は

(使徒の力!)

「ようやく来たか。」

大祐は特に何の感情もない言葉を放つ。

一方で風太は力と共に本能が、殺意と性欲、破壊衝動が強くなるのを感じていた。

「鎖を外すついでに“起こしておいた”。お前の方は私に比べれば元の力も少ない。すぐに完全な使徒となるだろう。それまで待て。」

そして数分が経ち

「どうだ？まだ終わらないか？」

魔王が聞けば

「もう大丈夫です。久々の感覚が心地よく感じられます。」

忠実なシモベが答える。

「ふん。昔同様に普段は敬語を使わなくていい。機嫌の悪い時だけ  
気をつけろ。」

「わかった。」

「それよつせつき句を言おうとした。」

「ああ。あの召喚式の服従についてだけじ、あれはもともとそういう機能がついてて今の王族にはどうじゆつもないとかの可能性はないのか？」

先ほどと違ひスラスラと話す風太。

魔王が瞳の色が変わり身にまとう気配も大きく変わったのに対し、風太には外見上の大きな変化はない。

「話しかけてきた召喚士を覚えているか？」

筆頭魔術師であり第二王子でもあるシユタイナーのことだ。

「覚えてる。王と同レベルで頭を下げたくなったな。顔が似てたし王族だと思つけど。」

「あの召喚式は王族に服従するようになつていた。特に1番は王に對してだ。だが巧妙に隠されてはいたが割と最近のものであろう新しい式が組み込まれていた。あの召喚士にも王と同レベルで服従するようにするためのものだ。そして書き加えることができるなら、消すこともできるタイプのものだつたからなあの式は。」

一息つき飲み物を飲んだ後、再び語り出す。

「つまり本気で服従の能力を解こうと思えば解ける。しかし連中はそれをしていない。よつて有罪だ。」

「なるほどな。それじゃあ、さっそく殺しに行くのか？」

ワクワクした顔で尋ねる風太は、もはや初めに尋ねた魔王の力を取り戻した詳細な理由などどうでもよくなっていた。

現実に今ある力を振るいたくてしようがないのだ。

「それも良いがな、どうせなら野望が実現しかかつてゐる時に殺してやろう。充実感を覚えてる時にすべてぶつ壊してやろう。せつかくバカ一人が服従してゐる状態だしな。」

「竜也と山彦はそのままにするつていうことか?」

「しばらくな。当面は勇者として活躍させる。そしてこいつらがいくつかの国を奪い取つた後にこの国を消してやろう。」

「それはそれで面白そうだな。じゃあ俺たちはどうする?」

「特に決めてはいない。気まぐれにやりたいことをやればいいだらう。」

残酷な笑みを浮かべて宣言する魔王。

そして同じような笑みを浮かべる使徒。

「よつやく私の力もほぼ元通りになつた。」

そう言い膨大な魔力で編みこまれた、金で縁取られた漆黒のマン

トを生み出し身に着けると

「行くぞ。」

同時に一人の姿が搔き消えた。

翌日、勇者が一人消えたことで城内は大騒ぎとなる。しかしそれもすぐに収まることになるのだが。

山彦と竜也は王族への服従によりすぐに優先順位の低いことと認識するようになる。

王は焦り、探し出すように命じるが残った一人の力を見たことで戦力は十分と判断する。

山彦と竜也があまりにも大きい力を持つことから召喚の際に付与される力は一人で大部分を手に入れ、逃げた一人はほとんど力を持たないと考えたのだ。それにより服従の効果も低く、逃げるという選択をとつたのだと。

実際に過去にそのような事例が数回あったことや、謁見の際に風太が正氣を保つているように見えたと多くのものが感じたことなどからそう判断された。

勇者たちもそれを裏付けるような発言をしたこともあり（ただし

その発言は大祐が気絶させたときに意図的に刷り込んだものである  
、逃げた二人に関しては秘密裏に処分するよう命令を変更する。

そして一般には勇者の召喚の情報は伏せられる。

やがて勇者が表舞台に立つとき、国民たちに公表された勇者は  
“2人”であった。

## 4話 ファーリーンへ（前書き）

細かい設定は後で変わるかもしれませんけどとりあえず投稿しました。

## 4話 フィールーンへ

城を抜け出した二人は城下にいた。

城門を抜けた先には貴族の屋敷が立ち並びそこを超えると再び大きな壁がある。そしてその向こうに平民たちが暮らしていた。王城を中心としたドーナツ状に貴族街、平民街が広がっている。

夜は深く、王城や貴族街の屋敷からは明かりが漏れているが平民街は真っ暗で通りには人の気配も感じない。

一方で城内や貴族街には多くの衛兵がいてその出入口には固く閉ざされた城壁があるが空を飛び空間転移を使いこなす魔王の前には意味のないものである。

「さて、まずは最低限の知識を得るか。」

大祐は適当な家に忍び込むと、寝ている男の頭に手をかざし記憶の中にある情報を覗き見た。

数秒後には隣に寝る女の頭に手をかざす。次いでその幼い子供へと。

同じような行動を他の建物でも繰り返し、風太が待つ人気のない場所へと戻る。

得られた情報を風太の頭に直接転写する。

そうしてこの世界の平民が持っているおおよその常識は理解したのであった。

すでに貴族たちにも同様の作業を行っているために平民が知らないことも理解している。

オルティガ王国の西にはさまざまな自治区があり西の端には巨大な帝国がある。

南には多数の小国があり乱れさらに南にエルフの大森林地帯、それを超えると大きな王国が一つ。

北には複数の国があり、さらに北へ行くと寒さに強い獣人や、洞窟や地下を拠点とするドワーフの国。

東にはこれまた複数の国があり、その先の大山脈には竜が住み、その東の大砂漠を超えてくる魔族の監視を行っている。

国は单一種族の国もあれば混合しているところもある。

行き先を決めかねている魔王が「X、お前に希望はあるか?」と問う。

「悩むな~俺はエルフ萌なんだけどこの世界のエルフは…」

それに対しても困惑した顔で答えるX、「こと風太。どうやら氣分で呼び方を変えるらしい。

「ああ、なるほど。」と、風太の困惑の理由を理解する。

「まさかエルフが不細工の代名詞だとは…」

大きな声で風太は叫ぶ

そう二人がのぞいた常識ではこの世界でのエルフとは不細工な種族であった。実際に他人の記憶の中にいたエルフはすべて不細工だった。

「ドワーフや獣人、ドラゴンはイメージ通りなのになんでエルフは不細工なわけ？おかしくね！？エルフは美形と相場は決まっているのに！？」

風太の心からの叫びを無視し魔王は再度問う。

それに対し今度は真剣に答える風太。

「特に行きたいとこないし適当に街を襲えばいいと思つ

のだが。この国はこれから戦争頑張つてもらうから、俺たちは何もしない方がいいんだよな？んで確か西のクレスト帝国と戦つようなこと言ってたからそっちも除外。」

「南は多数の小国、エルフ、その南は原始人のような部族の王国だな。」

「不細工エルフや原始人も除外つと。北は寒そつだから個人的にパス。」

「残るは東だな。」

大祐は腕を組み暫し考える。

そして顔を上げて告げる。

「決めたぞ。東の2つ先の国『ファーリーン』で遊ぶ。飽きたらその北東にある『勇者の聖地ミリティア』へ行き各地から集められた聖女や巫女を食い散らかすとしよう。そして竜族の住まう大山脈『断魔の靈峰ドラグニール』を越え砂漠の彼方の魔族とやらを見物する。」

「聖地には興味あるけど砂漠越えは嫌だなあ」

ヒロ太は弱めに反対を表明するけど魔王はそれを無視しファーレンまで転移で行くことを告げる。

『遠見』の魔法を使い数百キロ先の国を確認する。

そして未だブックサ言づ部下を連れて転移した。

「リジがファーレン？」

転移後すぐに風太が声を上げる。そこは街道なのだらう、家や煙などは見当たらない。

「ファーレンの街道だ。国境から少し離れた場所だ。久しぶりの異世界で時間はいくらでもあるんだ。歩いてみるのも悪くはあるまい。」

やう告げ歩き出し、慌てて風太もついていく。

雲一つない空には数多の星が輝き、夜中ではあっても視界は悪くない。

周りの自然を鑑賞しながらじぱりん一人は無言で歩く。

歩いてる途中でいくらかのモンスターがいた。

この世界のモンスターと魔族は別と区分されているようだ。

街道を歩く一人を視認したモンスターは食料として襲おうとしてくるものの大祐か風太が見つめるだけで訳の分からぬ恐怖を感じ逃げ出していく。

自然の中で生きるだけあり危機を察知する能力は優れているのだろう。

結局、本格的に襲われることもなく2人は黙々と歩き続けていた。

歩き始めて2時間が経過したとき変化があった。

空は徐々に白み始めていてもうすぐ日が昇るのだろうと思われたとき、2人の耳に金属がぶつかり合う音が聞こえた。

音の発生源はおそらく数キロ以上は離れた場所だ。

人には聞こえないだらう距離の音も今の一人にはとらえられる。

風太が耳に手を当て集中して音を聞き取る。

「これは…………戦つてゐるな。微妙に人の声がするし。」

「そうだな。歩くのにも飽きてきたころだ。ちょうど良い、行くぞ。」

それだけを話し、すぐさま近くまで転移した。

転移先では予想通りに戦闘が行われていた。

荷物を大量に満載した馬車が3台と人が乗るのでありう馬車が2台。馬車を守つて戦うものが30名ほど。馬車を襲おうとしているものが50名ほどいる。

その様子を少し離れた場所、魔王の魔法で姿を消して観賞してい

た。

「小規模な商隊とそれを護衛する冒険者、金を目当てに襲い掛かる傭兵崩れの盗賊が50名ほどつてところか。どうする？大祐。」

「冒険者の中に女が4人か。後衛の女2人だけ合格でいいな、前衛として戦つてる2人はごつくていいな。…………どうやら馬車の中にも女が1人いるな。そつちは……………合格だ。」

何が合格かは尋ねなかつた。代わりに

「前衛のあの赤い髪の女は俺が貰うぞ。」

「好きにしろ。」

「あとはどうする？」

「情報は合格した女から引き抜けばいいだろ？ あとはいらん。」

「言つと同時に魔法を発動させた。」

バックス＝オーツはAランクの冒険者である。

Sランクは『伝説の勇者』たち。

Sランクは『英雄』と呼ばれるもの。

Sランクは勇者の中でもさらに優秀な者のみが届く領域であり、  
Sランクは普通の勇者のランクである。

+ Aは勇者の血を引く一部の天才がなり得るランク、故にその次のランクであるAはこの世界の一般の人間が届き得る最高のランクである。

勇者が冒険者になることなどほとんどなく（それでも各国が武力

として頻繁に呼び出すためにいることはいる）、勇者の血を引く王族や公爵が冒険者になることもほとんどない。

よつてアラシクはある意味冒険者の最高ランクと考えても良い。

バックスもまた最高の冒険者の一人と世間では受け止められていた。

彼の名前が知れ渡つたのは約20年ほど前、魔族の監視者たるドラゴン族の1匹が碇を破り禁断の儀式を執行し失敗、邪竜に墮ち各国に多大なる被害を与えた時のことである。

同族のドラゴンたちは魔族の監視という使命の元、大山脈を下りることができず討伐は国々に委ねられた。

初めは勇者が討伐に向かうが邪竜は複数の国々を移動し暴れまわっていた。

勇者とは国の象徴でもありその勇者が他国へ侵入することは国と国との関係において多大な影響を及ぼす。

事実、ある国は邪竜の討伐を口実に勇者を送りその国の一員を占領するという事件があり、ついには全面戦争となつたのである。

人と人が争う最中にも邪竜は襲来する。

勇者、人、邪竜が争った結果、大地は荒れ、国は疲弊しやがては両国ともに滅ぶこととなつた。

レーヴした時に竜を討つため立ち上がつたのが冒険者たちであり、20歳の時のバックスである。

冒険者ギルドは国を越え結びついておりまた国からは独立した組織である（たまに例外があるが）。よつて国という壁を越えて活動することができる。

あるパーティがそれまで傷一つ負わせられなかつた邪竜を追い詰めることに成功するがあと一步のところで1人を残し殺されてしまう。

この時残つたのがバックスである。

彼は仲間に託された魔法の武器を身に纏い自分を鍛え、ついには邪竜を討ち取ることに成功したのである。

そしてその功績によりAランク冒険者となり、勇者とその血族以外で初めて聖地ミリティアでの『祝福』を受けたのである。

その後も彼は世のため人のためと戦い次々とその名声を高めていく。

勇者の血を持たない彼の英雄譚は、同じく勇者の血を持たない大勢の平民の憧れとなり希望となる。

「いつして彼は生ける伝説となつたのであつた。

20年が過ぎ40歳を超えた現在も『祝福』を与えられたことにより若い時分とほぼ同等の実力を誇る彼の元には多くの人が集いその冒險者としての生き方、戦い方の教えを乞つ。

今も10年以上を共にした仲間たちと共に、数多くの冒險者に冒險者としての在り方を教えていた。

今回彼が受けた依頼は商隊の護衛である。

最近勢力を伸ばしてきた商会の一行が運ぶ3台の荷馬車と商人たちの護衛が目的である。

彼らが通る街道はモンスターも少なく弱いので本来は+1ランクの護衛がいれば十分であったが、近ごろ北方から傭兵崩れの盗賊団が移住し街道付近を縄張りとしていてまたその数も全部で100名ほどになり多くの被害が出ていた。

Bランクの冒險者パーティでさえ殺されるという事件にまでなり、

困り果てたところでバックスが名乗りを上げる。

そして商隊を護衛し街を出発した。

護衛をしているのはバックスのパーティとその傘下のパーティ（中堅3つ、初心者2つ）と大人数となつた。

盗賊に手を焼く商人ギルドが盗賊を倒してくれたら賞金を出すと  
いうことで、もし護衛中に現れなかつたら初心者は置いて盗賊の本  
拠を討つことで報酬は賄う予定である。

気のいい仲間や依頼主たち。天氣にも恵まれ旅は順調だった。

バックスにとって嬉しいことに、今回初参加の初心者パーティの  
1つ『平和の剣』の4人は才能に満ち溢れた者ばかりであった。

農村出身の剣士 カイル

カイルの幼馴染で魔法使いの リーシャ

修行中のクレリック ユフィ

ユフィに一目ぼれしてついてきたレンジャー ロック

チームとしてもバランスが取れ、仲が良い彼らは、未だ10代半ばでまだまだ未熟ではあるが将来は4人とも+Bに届くであろう才能の持ち主であった。

特にカイルに至ってはバックスをもしのぐ才能を持っていたのである。

自分も年老い徐々にではあるが力を失っていく中で後継者を探していたバックスにとって、カイルは相応しい少年だったのである。

バックスは彼らに、カイルに自分の持つすべてを託そうと心に決める。

しかしその願いがかなうことにはなかった。

バックスたち一行が護衛を初めて1週間。

野営を行い、そろそろ朝になるだろうという時に矢の雨が降つてきた。

ついに盗賊が現れたのである。

事前に気付いてたバックスや古株が魔法で防いだので被害はなかつた。すぐさま寝てる連中を起こす。

矢が防がれたことで直接剣や槍で攻撃しようとしたのが盗賊たちが姿を現した。

その数80名。

事前情報では100名以上いる大規模な盗賊団という話だから、油断せず古株の魔法使いにあたりを探らせると誰もいないということがった。

おそらくは別の場所で働いているか本拠地にいるのだろう。

盗賊が攻めてくる前にすぐさま最適な陣形を整える。

その様子を見て一瞬躊躇ついたが人数差があることと、

向こうには護衛する対象がいるためにそれが足かせになると考えたのか盗賊たちは襲ってきた。

最も護衛の中にバックスがいると分かればまた話は変わったのだろうが。

それなりの統率の元向かってくる盗賊たち。

相手はBランクを倒す盗賊。

初心者は当然、中級パーティも足がすくむが流石はAランクの竜殺しバックスである。

指揮を古株に任せると一人で突撃、瞬く間に10人を屠つたのである。

驚き足を止める盗賊とその姿に闘志を燃やす冒険者たち。

盗賊たちは距離を置き

矢を放つがその前にバックスは仲間の元に下がっていた。

バックスなら一人で倒せる相手である。

だが新人たちに経験を積ませるために彼は後ろに下がった。

これは依頼を考えると護衛失格な行為であるが、バックスと古株

の仲間ならこちら側には1人の被害も出ないと判断したためである。

実際にそれは間違いではなかつた。バックス達にはそれを可能にするだけの実力があつた。

今度は油断なく接近してくる盗賊たち。迎え撃つ護衛もバックスの指揮の元、慎重に構える。

そしてついにぶつかり合ひつことになった。

ピンチになりそうな者をバックスや古株が助けながら、冒険者たちは20名ほどの盗賊を倒してた。

冒険者側の死者、重傷者はいない。

ただし初心者たちは体力や魔力がそろそろきつくなつてあり、こちらが潮時とバックスは単身で動き盗賊をさらに20名ほど倒した。

これで数は互角。

冒険者たちも疲労がたまつていいようだが、一番強いバックスは未だ悠然と構えている。

旗色が悪くなつたことを感じた盗賊のリーダーは撤退を宣言し、

逃走を図る。

それを単身で仕留めようとバックスが動く、その時！

世界が氷に包まれた。

「なんだこれ」

カイルが呆然とつぶやく。

隣にいたリーシャにしてもこんな現象は初めて見るもので何が起きているのかわからない。

高位の魔法の一つなのか！そう思い他の人たちを見渡すも中級パーティーやバックス率いるAランクパーティに所属するものでさえ驚愕しているのがわかる。

そして改めて遠くに視線を向ける。

先ほどまで太陽が昇りかけ明るくなりつつあった空が今は見えない。

前も後ろも右も左もそして真上でさえも氷に覆われていた。

「陣形を整えろ。回復薬をつかい傷も魔力も回復させておけ。油断するな！」

すぐさま戻つてきていたバックスが指示を出す。

それに従いみんなが動き出す

「バックス、これはなんだ？」

古参の剣士がバックスに尋ねるが

「わからん。盗賊たちの仕業でないことは確かだが。」

「うりーしゃが回復をしながら盗賊たちの方を見ると彼らも動搖しているのがわかる。」

想定外の事態なのは明らかだ。

「うおー ゾクゾクしてきた。絶対凄いことだよこれー！」

「不謹慎ですよ。ロック」

興奮したように叫ぶロックとそれをとがめるユフィ。

「大丈夫だつて。何があつてもユフィは俺が守るから。」

「そういうことを言つてるんじゃありません。だいたいあなたはいつも」

言い合ひ一人を見てつい笑つてしまつ。こんな時でもいつも通りの一人に少し安心する。

「リーシャ大丈夫か？」

「カイル。私は大丈夫。」

「何が起きてるのかわかるか？」とカイルが尋ねるが

「わからないわ。バックスさんにもわからないようだしあたしの知識にもこんな魔法はない」

「わたしも知らない現象です」

「リーシャやユフィでも知らないことなのか。」

いつのまにか言い争いをやめていた一人が会話に参加する。

一人とも若輩で実践は未熟ながらも毎日勉学に励み、その知識量はその道の上級者にも引けを取らないことを知っているロックがつぶやく。

「とにかくしつかりとバックスさんの指示に従い行動しよう。」

リーダーのカイルが言つとみんなが頷く。

「万が一のときは俺はコフイを守るからカイルはリーシャをしつかり守れよ。」

「わかつてゐる。」

力強くうなずくカイルの言葉を聞きほほを紅潮させながらリーシャはカイルにぐきを刺すことも忘れない。

「無茶はしちゃダメよ。」

「わかつてゐるよ。ケガをしないよつて、でもしつかりとリーシャを守るから。」

そして見つめあつ一人、それを見て

「良いなあ。ゴフイもあーゅー反応してくれないかなあ？」

「しません。」

にべもない反応に落ち込むロック。

仕方ないですね」という顔をして

「ロックもケガをしないようにしてください。あなたが傷つくと『少し』は悲しいですから。」

『少しは』を強調するゴフイ。

でもそれで十分嬉しいロックは

「わかった。ゴフイのためにも怪我しない！」

もう言ひ口フイに抱きつき

「ゴフイー大好きだよー」

「ひとつー離れてくださいー！」

いちや いちや する『平和の剣』の様子を見ながらもう一つの初心者パーティーグローリーズは

「いいな、俺たちも女の仲間が欲しい。」

10代半ばの男だけのチームはみんなそう思つのであつた。

遠くから盜賊たちの悲鳴が聞こえてきた。

盗賊たちは先ほどよりも遠くに行つており何が起きてるのか詳しいことはわからないが次々と数が減つてゐる様子は確認できる。

リーシャたちの背後にある氷の壁を壊そうとしていた人たちも戻ってきてバックスの指示に従い陣形を整えた。

そしてその辺には盗賊たちの声が全く聞こえない。

全員殺されたのだろう。

あまりにも早すぎる展開だ。

「何が起ころかわからん。みんな気を抜くな！」

バックスの声が響き渡った途端、目の前に2人の男が現れた。

時は少し戻り魔王の力で商隊と盗賊を巨大な氷で閉じ込めたあと、二人はまず盗賊の元に向かつた。

盗賊たちは世界が氷に包まれてしばらく呆然としていたが。リーダーの指示の元すぐさま撤退し始めた。

そして商隊から離れた、氷の壁までくると力自慢たちが一斉に壁を壊そうと攻撃し始める。もつとも氷には傷一つつかないのだが。

そんな様子をぼんやりと見ながら魔王とヒロ太は話す。

「あいつらは全部殺してもいいんだよな？」

「30人ほどか。俺が25人でお前は5人だ。」

「おかしくね！？普通は15ずつだろ！百歩譲つて上下関係考えたとしても20と10じゃね？」

「ちつーまつたくわがままな部下だ。まあ、この世界に来て初めての殺しだからな。15ずつで行くか。」

その言葉を聞き不思議そうな顔をする風太。魔王がこんなあつさり風太の言い分を聞き入れるなんて珍しい。

「どうした？」

「いや、なんか違和感が。…………お前をつき『俺』って言ったか？」

「言つたな。」

苦笑しながら言つ魔王。

城を出てからずつとどこかで違和感を感じていたが、これはやっぱり変だ。昔の魔王っぽくない。

そんな風太の内心が顔に出でていたのだから、察した大祐は言つ。

「人間の部分が完全には消えていない。つというより混ざり合った状態で変化が終了したみたいだ。」

「どういふことだ?」

「戦闘能力は問題ない。だが人格面が混ざっているようだ。城の中では魔王の力が起こされたばかりで魔王の面が強く出ていたがここまで移動するうちに人の部分がまた盛り返し、結局微妙に混ざったまま定着したんだろうな。」

「穏やかになつたってことか?」

「いや、気性は落ち着いたかもしないが氣に食わなければ殺すことに変わりはない。ただそれよりも性欲が強くなつたようだ。殺人衝動は魔王が持つもの。対して性欲は人も魔王も持つもの。合わさつた分性欲の方が強いつてことか。ま、調べなければ詳細はわからんがどうでもいいだろう。」

「なるほど。それで獲物を平等にしてもいいなんて言い出したのか。」

「そういふことだ。盗賊を殺すよりあつちの女を抱きたくて仕方ない。」

興奮したよつて言つ魔王。その目は情欲で溢れている。

「あ～やつぱり魔王は魔王だな。ただ優先される本能が違うだけで。

「

大祐は特に答えず薄く笑う。

「でもどうしてそんなことになつたんだ？」

「1番をコピーしてできた2番。その2番をコピーしてできた3番。このとき1番と3番は微妙に違つてもおかしくはないだろう？おまけに人間の体だつたり、魂に力を入れられたりとイレギュラーばかりだしな。」

風太は大祐のたとえに首をかしげる。

「どういう意味だ？」

「そんなことよりもむつたとやるぞ。 いらないなら全部私が殺すぞ。」

「

「や、待つて俺もやるぞ。」

話を切り上げ二人は同時に盗賊に襲い掛かった。

盗賊たちがいきなり現れた二人に驚いている間に魔王は一番近くにいた盗賊の心臓を手刀で貫いた。

次いで隣にいる男の腕を落とす。

「死や————！」

面白いから左腕を握り、骨を砕いた。

「ぐつわあああああああ————！」

横では風太が次々に殺している。

「て、てめえら————！」

三人の盗賊が向かってくる。

魔王はそれに対し腕を伸ばす。

そして開いた手のひらをギュッと握ると、3人の盗賊はものすごい圧力を受けたように圧縮された。

ブシューーーと嫌な音を立てて血が当たりに飛び散る。

魔王が指の力を抜くと空中に浮いていた肉団子が地面に落ちる。

その腕をそのまま次の獲物へ向けると、

「や、やめる！」「助けて。何でもするから助けてください。」

仲間が肉団子になるのを呆然と見ていた盗賊たちが次の標的が自分だと悟り必死に命乞いをする。しかし

再びブショ  
！――！――といづ音とともに血が噴出しあつさりと盗賊は殺された。

「フフッ フフフフハハハッハハハッハハハ――！いい気持ちだ！  
楽しいなあ！」

高らかに笑い続ける魔王。

同じように笑う風太と共に盗賊たちの命乞いを聞き流し、遊んでるかのような気楽さであつさりと皆殺しにした。

「盗賊は大体狩りつくしたな。残りの連中のところへ行くぞ。」

殺人よりも性欲！な魔王は風太にそう告げると返事を聞く前に転

移を発動させ、バックス達の前へと移動する。

いきなり目の前に現れた男たちに対し、冒険者たちは即座に戦闘態勢を取つた。まだ何も話していないが誰もが迷わず戦う意思を示す。

さきほどまで少しばかりは考えていた味方の可能性を即座に棄却する。

全員が一目でわかつた。

「この2人は盗賊だけではなく自分たちにも害をなす氣だ」ということが。

同時に魔王から発せられる気配に当たられて身体が震えていた。それでも彼らが逃げないのは、いやといつ時はバックスが何とかしてくれるという信頼があるからだ。

一方でそのバックスはこの状況の真の危険性を認識していた。

（この2人には俺でも勝てない……）

おそらくは逃げることも難しいだろう。かつて英雄と呼ばれるきっかけとなつたあの化け物よりも遥かに強い。特に赤い目をした男はやばい。桁が違う。

これらのことが頭の中を駆け巡る。

なんとか一人でも多く生き延びさせるために考へながら2人を観察していると、両方とも女だけを見ていた。目的は明白である。

バックスがここまで理解した時、2人は動き始めた。

「よし。やはり私の目に狂いはなかつた。胸はこくらいた。ちょっと物足りないが……まあ、良いだろ？。」

満足そうな魔王とは対照的に微妙な顔をした風太が言つ。

「思いのほかこついたんですけど。やつぱり一人くらい分けてくれないか？馬車の中にもいるんだろ？。」

「そういえばそだつたな。馬車の方は…………こつちは文句なしに合格だ。胸も大きいな。」

風太の発言の後半だけを拾う魔王。風太としても魔王が自分の女を分けてくれるはずがないことはわかつていたので特に文句も言わなかつた。

「はあ……聖地とやらに期待するしかないか……今日はあれで我慢か

……」

「ぶつぶつ言つてないでさつさとやるぞ。」

「はいはい、わかりやしたよーだ。」

言いながら軽い足取りで冒険者たちに近づいて行った。

数分で戦いとも呼べない戦いは終わった。

冒険者側の男で生き残つてるのはカイルとロック、そしてバックスだけだ。

その3人にとってもカイルは意識はあるものの両手足の骨を折られて動くことができない。ロックは気絶し、バックスは左腕を失い両足が地面から生えている黒い腕に捕まり動くことができないでいる。

女で生き残つているのはカイルの幼馴染のリーシャ、仲間のユフィ、中堅パーティの前衛であるキャスケル、そして馬車に乗つていた令嬢のマール＝クルパーだ。

彼女たちは現在、カイルの田の前で凌辱されている。

「ほらーもっと頑張らないとお前たちの大変な仲間を殺してしまつぞ。」

残酷な笑みを浮かべながら魔王が言つ。

その足元ではカイルの仲間の2人が裸で蹲り、懸命に口で奉仕している。

そして彼女たちの横では先ほどまで何度も犯され全身に魔王の体液を付着させたマールが氣絶していた。リーシャとコフィイはマールと同じく純潔を散らされ魔王の体液を全身に染み付かせながら、仲間の命を助けるために懸命に意識を保ち奉仕を続けていた。

「リーダー！ やっぱりどっちか貸してくれよ。」

『じつい女冒険者を先ほどまで襲つていた風太が言つが、魔王は無視する。

「やっぱ、何人か生かしておくれべきだったかなあ……そうすればもう少し遊べたのに。」

つぶやく風太と、楽しむ魔王。それを悔しさで怒り狂いながらも

動くことのできないカイル。魔王に声を封じられたために何も話すことさえできなくなっている。

(やめりーもうやめりー2人を離せー)

心の中でいくら叫んでも、2人を助けることなどできない。

(何でー…どうしてこんなことにー…)

バックスはこの一人組の男の正体に気が付いていた。といつより、自分がここまで手も足も出ず勝てない相手など勇者以外に考えられなかつた。

そのためカイルと同様に屈辱をかみしめながらも、既に自分たちではどうにもならないことを悟つていた。

紅い目の男は女たちを気に入つたようで、壊さないよう何度も回復魔法をかけているのがわかる。そして自分が楽しむためにバックス達を生かしているのもわかる。バックスたちが生き残れるかどうかは女たち次第であることもわかつていた。

だから声を出すことはできるけども余計なことは何も言わずにいた。

(勇者を殺すには勇者以外にはない。何としても生き延びて、このイカれた勇者の存在を国々に伝えなければーこのままでは凄まじい被害が出る)

自分のパーティの下についた女たちが犯されていることに怒りを

覚えている。だがそれ以上にこの危険な存在を知らしめなければならぬという使命感を優先した。

この一人は昔のドラゴンと違い何回挑もうがどうにもならない存在だ。

急に目の前に現れた二人は素手で鎧や盾ごと身体に穴をあけ、あつさりと何人かを殺した。我に返つた冒険者たちが攻撃したが紅い目の男には傷一つつけられない。そのまま攻撃を仕掛けた者たちが殺されると、離れていた冒険者は一斉に逃げ出した。

逃げた人たちをもう一人の男が追いかけ、氷の壁まで追い詰めるとのんびりと殺戮して回る。

そしてバックスや平和の剣、数人の逃げなかつた冒険者、馬車の中の人たちは女とバックス達を残し紅い目の男に遊ばれ殺された。

残つた男を動けなくすると女たちを犯し始めて今に至つている。

痛みで泣き叫びやはは強引に快樂を覚えさせられた少女たちの声や、悔しさに泣くカイルを見てバックスも強く湧き上がるものがあるが、それでも黙つている事しかできなかつた。

かつて仲間たちを屠つた邪魔のときのように……自分の感情よりも優先しなければならないものがあるからだ。

## 5話 暴虐の始まり（後書き）

殺戮の場面は控えめで書いています。魔王ルートはほとんど殺しまくる場面であることと、規制がどのくらいでかかるのかわからな  
いので……

様子を見ながら書きつつ、必要であれば修正する方向で行いつと  
思います。

## 6話 連れ去られる女たち

「……ハア……ハアハア……」

魔王たちが冒険者に襲い掛かつて3時間ほどが経過した。

宴は終わり、倒れこんだリーシャとコフィーの荒い呼吸だけが響いている。

2人は強引に純潔を奪われ、そのあとも仲間の命を盾にさんざん凌辱され続けたが回復魔法がかけられたために大きな傷などはない。

本人たちが気付かぬうちに心の傷でさえも強引に回復させられ、女としての尊厳を奪われた羞恥や屈辱、ショックによつて放心状態になることなどもない。

むしろ魔王への怒りと反発心、そして生き残つてゐる仲間を助けようという思いが湧き上がつていた。

とはいえ疲れ果ててゐるのは間違ひなく、今はまず呼吸を整えようとしているようだが。

一方で魔王は脱いだ衣服を纏い直し、「なかなか良かつたな。お前はどうだった?」と爽やかな笑顔で風太に問いかけた。どうやら一時的に衝動を発散させたことで落ち着いたらしい。

「微妙だよ！」

機嫌のいい大祐とは対照的に風太は機嫌が悪いようだ。

予想以上に「」つゝ傷だらけの身体だったキヤスケルを一回抱いて直ぐに殺した風太は魔王が楽しんでる間、羨ましそうな顔で見ているだけだった。魔王はそれに気づきながらも敢えて無視し、女を独り占めしていた。

「んで、そいつらはもう飽きたんだろう？なら俺にやらせろよ。」

そう言い倒れているリーシャに近づいていた風太に対し魔王が制止をせる。

「ダメだ。」そつらは連れて行く。

「はあ？」

「予想以上に良い身体をしてるからな。まだ未発達などつもあるが数年もすれば火星の貴族の女どもにも劣らないものになるだろつ。」

「え――――じゃあそつちの氣絶してお嬢さんを。」

「ダメだ。」そつちは既に十分にいい女だからな。だから無理せず休

ませてゐるんだらうが。」

「いきなり3人かよーするくね?」

「ズルくなどない。魔王の権利だ。」

言い合つて一人の言葉を聞いているバックスたち冒険者組。バックスと連れ去られる当人である女たちは何となくわかつていたことだから驚きは少なかつたが、焦つたのはカイルと目覚めると同時に動きと声を封じられたロックだ。

(そんなことはさせないリーシャは絶対に )

(ふざけるな! ユフィは ちくしょうじけねえークソ!  
クソ! )

カイルはリーシャと、ロックはユフィと。

ともに想い合つてゐる大切な人を汚すばかり連れ去るという。

なんとかして止めようと必死にもがくが魔王の魔法によりまつた  
く動くことも声を出すこともできない。怒り、悲しみ、屈辱、焦燥、  
さまざま感情が駆け巡るがどうにもならなかつた。

カイルたちと同じくまったく動けない状態のバックスはリーシャたちが犯されている間も大祐を観察していた。そのためにこの展開が予測できていた。「おそらく自分たちは生き残るだらう……リーシャとユフィの選択次第ではだが」と予感していた。

（すまないお前たち……だが何を差し置いても今はこの場を生き残ることが優先だ。）

全ての感情を押し殺し、ただ必要なことだけを見据えていた。

「よし、ひとまず移動するぞ。まずは食事だな。細かいことはそれから決めるとするか」

魔王は一人呟くと片手を上げた。その手が光ると同時に3人の女たちも白い光に包まれる。また、マールが乗っていた馬車とそれを引く馬も光に包まれる。

数秒のうち、光が消えるとすべての傷が消え、人も馬も体力まで回復していた。

「風太！お前は御者をやれ。お前たちはついてこい。」

一方的に言いはなし、そのまま馬車へと歩き出した。女たちが逃げ出すという可能性をまったく考慮していないような態度だ。

実際その判断は間違いではなく、馬車に乗り込む魔王を見た3人の女たち複雑な感情を押し殺し黙つて後に続く。風太も文句をぶつぶつ言いながらも後に続いて歩き出すと、その背後から声がした。

「待て！リーシャ！ユフィ！ダメだ！」

「ふざけるなお前ら…………みんなを返せ。」

拘束を解かれたカイルとロックがバックスに抑えられながらも、声を上げていた。

しかし女たちは苦しそうな表情をしながらも振り返らず魔王の後に続く。

魔王は文字通りの暴君であるため自分の感情や欲求を全く隠そうとしていない。取り繕うことさえしない。わずか数時間の関係とはいえ自分たちを散々抱きまくった男の性格をリーシャもユフィもマールも正確に把握していた。

魔王は男たちに興味をなくし食事に気が向いている。女たちが乗り込めばそのままここを立ち去りカイルたちの命は助かる。それを女たちは理解していた。

同時に自分たちが足を止めればカイルたちの命が再び危機に陥ることも。そして何よりも抵抗すれば自分自身がどうなるのかも彼女たちは充分に理解していた。

ホントは今すぐに逃げたい、カイルたちのもとに駆け寄りたい！  
そう思つても仲間を思う故にそれは決して出来なかつた。

冒険者ではないマールはカイル達に対しては特に強い感情を抱いてはいない。そんな彼女はただ紅の目をした男が恐ろしく従う以外の選択肢がなかつた。

「リーシャー！リーシャー！ツビツビして！？ 離してくださいバックスさん！俺は一人を！」

「離せ！離せよお前！あいつらを見捨てる気かよ！」

「なんで一人が大人しくついていくかわからないのか！お前たちを助けるためだろ？！」

暴れる一人に対し、バックスも声を荒げる。

カイルとロック、一人の言いたいことは嫌というほど理解していた。それでもここは大人しくしているしかなかつたのだ。いつか女たちを助けるためにも。

無理やり自分を落ち着かせ改めてカイルたちに言つ。

「今ここで襲い掛かっても犬死するだけだ！そして女たちはあの男が飽きるまで弄ばれることになる。あいつらは間違いなく異界から呼ばれた勇者だ！俺たちではどうにもならん。各国に応援を要請し、俺たちも力をつけることが最善なんだ！」

「わかつてゐ！だけど今、あいつらは

必死に言い合ひ彼らの声を背に、涙を流しながらリーシャたちは馬車へと向かう。一刻も早くこの場を離れるために足早で。恋しい男を救うために汚されるのをわかつていながら馬車へと乗り込んだ。

それを確認した風太は「良いなあ…俺も可愛い女が欲しいなあ…」と低いテンションを保ったまま馬に鞭を打つ。

そして馬車は動きだし、少しずつこの場を離れていく。

「待て…ちくしじょう…待てよ…返せ…シシシシシシシクソ…――――！」

誰とも判別のつかない叫び声だけが、この虐殺の跡に響き渡った。

あの虐殺から数時間が経つた今も風太は御者をやつていた。大祐が女たちから知識を取り込み風太に受け渡したものから参照すると、

次の町といつか村まではあと2日ほどかかるらしい。

といつのも先ほどの盗賊連中が暴れまわったおかげで付近の小さな集落は軒並み全滅しているようだ。

「飯がまだまだ先と分かった魔王は自分の“宝具”を用いて食べ物を用意し食べ終わつた後は再び女で遊ぶことにしたらしい。

（はあ……良いなあ……たまには最高級の女を抱きたいなあ。）

そんなことを考える風太の背後からは今もコフイの大きな嬌声が馬車の中で響き渡つてゐる。どうやら性魔法を使い無理矢理に感じさせているようだつた。自分が気持ちよくなるよりも女を喘がせることを優先していることから大祐はあの3人をかなり気に入つたようだ。

かつて魔王になつた世界において、大体が一度抱いたら飽きて処分していた。割と上質な女は飽きるまで自分本位で抱き、気に入つた女は今のように性魔法で優しく抱いて強引に心も自分に向けさせようとしていた。

そしてお氣に入りの中でも女としての機能以外にも優秀なものを持つ場合は、性魔法による簡易な眷属としたり自分たちのように魔王の力を直接与えられ大きな力を持つ眷属となつた者もいた。

そんなわけでリーシャたち3人はお氣に入りなのはわかる。

「はあ……」

風太の口からはなんとなしに溜め息が出る。お気に入りである以上、自分に回つてくることはないことが確定しているからである。

（リー・シャツて女はピンクの髪に幼いながら可愛い顔立ち、スタイルは普通だつたな。ユフィちゃんは金髪に綺麗で大人っぽい顔立ちでこれまたスタイルは普通。けど大祐の様子から将来性があるんだろうな。貴族っぽいお嬢様はオレンジがかつたロングに、けしからん胸してたなあ……俺的にはリー・シャタンが一番好みなんだが……無理だらうなあ……）

こんなことを考える風太は、ユフィからリー・シャに変わった嬌声を聞きながら馬車を進ませる。

時間は昼、暖かな日が差す草原を狂氣を孕んだ馬車は進んでいく。

いくらかの時間が経過し眼前には小さな集落が広がっていた。名前もない小さな集落である。

人口は百人ほどの小さな集落で近くにある畑では性別、年齢に関係なくおそらくはほぼ全ての村民が農作業に取り掛かっているのだろう。

雲一つない晴れた空からは暑い日差しが降り注ぎ、村人たちは暑さに大量の汗をかきながら一生懸命に働いていた。

魔王が女たちから取り上げた知識から、この付近の領主はそれほど重い税を課してはいないため比較的にまともな生活を送っているらしいこともわかっている。

「はあ／＼疲れた……転移なら一瞬、二人で普通に走れば1時間ほどで着く距離なのに……馬車で4日もかかるとは……」

独り言にしては大きい声で風太が呟く。

「なんか文句あるのか？」と尋ねる大祐に対し「別に／＼ないっすよ。」と明らかに何かを含む口調で風太は答える。

風太が不機嫌なのは当然ながら女がらみの問題だ。  
そもそも2日で来れる予定だったのに魔王が途中、川で泳ぎたい（犯したい）だの、木陰で休みたい（犯したい）だの、空中に浮かんで風景を見たい（見ながら犯したい）だの所々で言つたせいで余計な時間がかかつてしまつたのだ。しかも一か所ごとに3人全員を抱くためこれまた時間がかかつた。

風太にも女がいれば違つたのだろうが、残念ながら風太専用の女はまだいない。

おまけに一番最初に停まつた場所では魔王がお楽しみの最中やることのない風太は仮眠を取ろうとしていたのだが、冒険者が近くを通り魔王にちよつかいを出そうとしたため以降風太が見張りをすることになった（このときの冒険者は魔王が殺した）。

近づいてくる連中の中に女がいればまた違つたのだろうが残念ながら全部人間の男だつたので結局数日前にキャスケルを抱いて以来一度も女にありつけなかつたのだ。

「はあーー

もう何度も目かわからぬため息をつく風太。

そんな様子を見かねたのか「そんな顔をするな。そのうち良いことあるや。」といつにななく上機嫌な魔王が言つ。女を抱いてるせいかやはり残虐性が少し薄く人間としての人格が表に出ているようだつた。

もつともそれも血を浴びればすぐに変化することなのだが。

「…………よしわかつた。この村はお前の好きにしていいぞー良い女がいたらお前のものにしても良い。」

「マジでーー？」

主の言葉を聞き勢いよく反応する風太。

「ああ、構わんさ。私は馬車の方で調教してゐからお前の好きにして來いー。」

「よつしゃ――――――じゅあ行つてくる。」

急激にテンションを上げた風太は村に向かつて猛スピードで駆け出した。

「……単純な奴だ……こんな村に可愛い女なんているわけないのに。

」

ホントに器量の良い者は盜賊か領主に連れられしていくか聖地に導かれるのがほとんどなんだけどな、と呟きながら大祐はリーシャ達のいる馬車へと戻つて行つた。

この集落から馬車で数時間ほどの場所に領主がいる大きな街『アッスラール』がある。

アッスラール付近の集落が軒並み壊滅しているとの報が領主の元へと届くのはこの2日後であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8777v/>

---

元魔王の覚醒(悪ルート)

2011年12月16日20時02分発行